

静岡県レッドデータブックの改訂（チョウ）

諏訪哲夫

2019年3月、静岡県レッドデータブック（動物編）が改訂され、県のホームページで公表されました。この動物編の中の昆虫分野について連載して内容を解説したいと思います。まず、今回はチョウについてです。

静岡県でこれまでに記録されたチョウは全部で159種です。このうち台風などで運ばれてきた迷蝶や、観葉植物につくなどして人為的に運ばれてきた種（偶産種）などが16種記録されています。南方系の種（ナガサキアゲハやサツマシジミなど）が近年の温暖化などの影響で分布を拡大して土着するようになった6種を除くと、137種がもともと本県に生息していた在来種となります。これらの在来種の生息状況は年々どのような変化をしてきたのか大いに関心があるところです。今年は特に7月の日照時間が例年になく少なかったことが影響したのか、野外に調査に出かけても見かけるチョウの姿がきわめて少ないと感じました。減少傾向は少なくとも10年は続いていて今年は特に顕著で、今後が心配されます。

2004年版と今回の改訂とを、準絶滅危惧までのカテゴリーについて比較しますと、絶滅した種：1種→5種、絶滅危惧ⅠA：4種→7種、絶滅危惧ⅠB：2種→6種、絶滅危惧Ⅱ類15種→9種、準絶滅危惧：5種→6種、トータルでは27種→33種となりました。確かに多くのカテゴリーで種数が増え、多くの種が絶滅の方向にランクが上がっており（表参照）、ますます状況は悪化の方向に進んでいると読み取れます。

なお、上記のカテゴリーに加えて情報不足1種、分布上要注目種15種、部会注目種5種を選定し、合計54種となりました。

以下、主な種についての概要を解説します。

1. 絶滅

2004年版の時点ではオオウラギンヒヨウモンがすでに絶滅していましたが、2019年版ではさらに4種増えて5種となりました。

オオウラギンヒヨウモン：文献などによりますと戦前は富士山麓、箱根、伊豆半島北部などの草原に比較的広く生息していたようですが、今ではどの地域でも絶滅したと考えられます。ミュージアムには1959年、伊東市大室山で採集された2♀

の標本が保存されています。

チャマダラセセリ：1970年代までは水窪町、静岡市葵区、富士山西麓に比較的広く、低山地にまで生息していましたが、1995年の富士山西麓の記録が最後となっています。生息地はよく草刈や火入れがされている草原や、森林を伐採後造林木などが大きくなるまでの数年間だけの草地（荒地）で、いずれも地表が攪乱された場所で、このような微妙な環境がなくなってしまったのが要因と考えられます。

シルビアシジミ：富士川・天竜川の堤防のほか、富士宮北高校校庭、富士宮市舞々木墓地、三島教育研修所敷地内などにも生息していました。どの生息地も極めて丈の低いシバ型の草地に限っていましたが、このような草地は管理の方法などが変わったり、改変されたりしたことにより消滅し、1996年ごろの天竜川堤防の記録が最後となっています。

スジグロチャバネセセリ：水窪町ヒヨウ越で1973年に本県で初めて発見され1975年には草木集落の畑の脇で2♀が採集されましたが、その後まったく発見されなくなりました。樹木を交えた草地に生息していましたが、現在では森林におおわれ草地などは全くなくなってしまい絶滅したと言わざるを得ません。

アカセセリ：1950年代と1970年代に富士山西麓の県境付近などからわずかな記録があるのみです。生息地となる、食草ヒカゲスゲの生育するやや湿った草原が消滅したため絶滅したとみられます。

以上の5種はすべて草原にすむ種で、草原の衰退とともにチョウもその影響を大きく受けているといえます。

2. 絶滅危惧ⅠA類

オオイチモンジ：大井川の源流部に生息する高山チョウの一種です。1951年ごろには榎島から二軒小屋の間にはかなり多産したという記述が残されています。その後1960年代にいくつかの記録があり、確かな記録としては1970年7月25日、千石沢で1♀が前年に続いて採集されています。この標本は2頭ともミュージアムに保存されています。この後、40年以上記録が途絶えていました

が、2014年、2015年二軒小屋と燕沢で確実に目撃され、2014年ごろ聖平小屋付近でも目撃されています。きわめて絶滅に近くなっている状況ですが、生息の可能性はまだ残されています。

ヒメヒカゲ：磐田原台地、三方原台地、湖西市、旧三ヶ日町の湿地に生息に生息していましたが、1970年代から湿地は埋め立てられ、あるいは植生の遷移が進むことで県内の生息地は失われ始め、現在では浜松市北区三ヶ日町の愛知県境のみとなっています。この唯一の生息地を保全するため、県の条例に指定し、保全対策を図ろうと森林管理署とも連携して進めています

アサマシジミ：富士山西麓の朝霧高原にのみ生息し、分断された生息地がいくつかあり、2000年の初めまではよく草刈りをされていた西富士霊園になんとか生息していましたが、その後は草原の衰退にともない絶滅に極めて近い状況です。

3. 絶滅危惧ⅠB類

クモマツマキチョウ：標高1200m以上の亜高山の溪流沿いにすむ大変美しい高山チョウの一種で、大井川、安倍川、水窪川の源流やその支流に生息していました。1990年代までは多くの産地で比較的安定して生息していましたが、その後急速に個体数が減少し、かつては多産していた大井川源流ですら今ではほとんど見かけることができなくなりました。

4. 絶滅危惧Ⅱ類

ギフチョウ：東の分布域は主に富士川と安倍川に挟まれた低山地、西の分布域は天竜川の西で旧浜松市北部の低山地と分断されて生息していましたが、1960年代までは各産地では多くの個体が見られましたが、拡大造林などの影響があって、現在では旧天竜市と旧引佐町との境のカレ山でしか見られなくなりました。市の天然記念物に指定され、合わせて環境整備も行われていることから、安定して生息が確認できます。

5. 準絶滅危惧

クモガタヒョウモン：かつては県内各所から記録があり、秋には静岡市の市街地の周辺でも見ることができました。しかし現在は標高の高いところからわずかに記録がある程度でほとんど見ることができなくなりました。原因はわかりませんが、

絶滅～準絶滅種の変更

■：より絶滅に向かっている種
 ■：変更のない種
 ■：ランク下がった種

	2004	2019	草原性	中間	森林性
絶滅	オオウラギンヒョウモン	オオウラギンヒョウモン	●		
		チャマダラセセリ	●		
		スジグロチャバネセセリ	●		
		アカセセリ	●		
		シルビアシジミ	●		
	1種	5種	100%		
ⅠA	スジグロチャバネセセリ				
	シルビアシジミ				
	オオイチモンジ	オオイチモンジ			●
	ヒメヒカゲ	ヒメヒカゲ	●		
		ホシチャバネセセリ	●		
		ヘリグロチャバネセセリ	●		
		ゴマシジミ	●		
	アサマシジミ	●			
	ヒョウモンチョウ	●			
	4種	7種	86%		14%
ⅠB	ヒョウモンチョウ				
	チャマダラセセリ				
		クモマツマキチョウ		●	
		ベニモンカラスシジミ			●
		ヒメシジミ	●		
		コヒオドシ		●	
	ウラナミジャノメ	●			
	ミヤマシロチョウ		●		
	2種	6種	33%	50%	17%
Ⅱ類	ホシチャバネセセリ				
	ヘリグロチャバネセセリ				
	ゴマシジミ				
	クモマツマキチョウ				
	ベニモンカラスシジミ				
	アサマシジミ				
	ヒメシジミ				
	ウラナミジャノメ				
	ヤマキチョウ	ヤマキチョウ	●		
	ヒメシロチョウ	ヒメシロチョウ	●		
	クロシジミ	クロシジミ		●	
	クロツバメシジミ	クロツバメシジミ	●		
	ウラナミアカシジミ	ウラナミアカシジミ			●
		ギフチョウ		●	
		ミヤマシジミ	●		
	フタスジチョウ		●		
	ハヤシドリシジミ			●	
	オオチャバネセセリ				
	キマダラモドキ				
	15種	9種	45%	33%	22%
準絶滅	ギフチョウ				
	ハヤシドリシジミ				
	ミヤマシジミ				
		ウラクロシジミ			●
		ウラギンスジヒョウモン	●		
		クモガタヒョウモン	●		
		ホシミスジ		●	
	ツマジロウラジャノメ	●			
	ウラジャノメ			●	
	オオミスジ				
	クロヒカゲモドキ				
	5種	6種	50%	17%	34%
合計	27種	33種	20種	7種	6種
			61%	21%	18%

今後注意してみてもいかなくてもはいけません。

表に示したとおり、準絶滅危惧種までにランクされた種は、ほぼ2/3が草原性の種となっていて、草原の衰退が著しいことがわかります。

なお、要注目種として新しくランクされたものでヒメジャノメがあります。これは10年ほど前までは最も普通の種でしたが、静岡市近郊からは近年急激に数を減じています。水田や雑木林の周辺が生息地ですが、里山の環境も変化していると考えられます。

10年後のレッドブックの改訂に向けて、ランクの高い種はもとより、現在普通種と思われる種についても注意を払っていきたいと思います。